

平成9年度
高崎市内小規模埋蔵文化財
発掘調査概報 2

上中居荒神Ⅱ遺跡
倉賀野東上正六遺跡
新保八坂遺跡

1998

高崎市教育委員会

(307
314
317)

序

待ち望まれた長野行き新幹線が開通し、既に開通しています上越新幹線と相俟って、群馬県の表玄関として、また、交通の要衝としての高崎市の重要性が益々高まっています。

さて、金融機関の倒産が続き、日本経済の停滞がいわれるなか、高崎市では、社会資本の整備・拡充に積極的に取り組んでおり、地方の同規模都市としては他に類例がないほどの発展を遂げております。行政・民間あげて開発を押し進めており、開発事業は全市にわたって展開されています。

こうした開発事業は、一方で、地域経済に活力ある発展をもたらすものでありますが、他方で、その性格から歴史遺産や自然環境の破壊を伴うものでもあります。

こうした事態に対して、高崎市教育委員会では、歴史遺産の一つである埋蔵文化財を保護する立場から遺跡の有無を調査し、でき得る限り記録を後世に残し、伝えていこうと努力を続けています。本報告書で取り上げました調査成果は、その一つであります。

本報告書で取り上げました遺跡は、上中居荒神II遺跡、東上正六遺跡、新保八坂遺跡の3遺跡です。これらの遺跡は、平成9年度に調査が行われ、その成果がまとまりましたので、概報として刊行するものであります。

上中居荒神II遺跡は、高崎市立佐野中学校の体育館建て替え工事に伴う調査で、平安時代の水田跡及び中・近世の水路遺構が発見されました。

東上正六遺跡は、住宅建設のために行われる開発で、調査の結果、浅間山古墳の一部と考えられる周堀が発見されました。堀の中から7世紀代の須恵器の破片や石製模造品等が出土しました。出土した須恵器は、浅間山古墳が築造された時代とほぼ同じ時期に作られたものと考えられます。

新保八坂遺跡は、ガソリンスタンドの建設が予定されている場所で行われた調査で、ここでは、古代の道路遺構と平安時代の水田跡が発見されました。道路遺構は、幅が数mのかなり立派なものであります。

本報告書が、多くの研究者の方々の研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力を頂きました関係者、関係機関、地元の方々に、厚く御礼申し上げますと共に、猛暑や寒風の中、調査に従事して下さった皆様方に感謝の意を表し序といたします。

平成10年3月

高崎市教育委員会
教育長 砂田成夫

上中居荒神II遺跡

印刷上の不手際で下記の注記が落ちていますので追加いたします。

4バ-7 図7 北3土壌セクション注記

1. 盛土
2. 黒色土層 5YR (2/1) 浅間山麓下木炭層
3. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
4. 黒色土層 10YR (1.7/1) 浅間山麓下木炭層

4バ-7 図7 北3土壌セクション注記

1. 盛土
2. 暗褐色土層 5YR (2/1) 浅間山麓下木炭層
3. 暗褐色土層 10YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
4. 暗褐色土層 10YR (4/4) 浅間山麓下木炭層
5. 暗褐色土層 10YR (4/4) 浅間山麓下木炭層
6. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
7. 暗褐色土層 10YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
8. 暗褐色土層 10YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
9. 暗褐色土層 5YR (2/1) 浅間山麓下木炭層

4バ-7 図8 南1土壌セクション注記

1. 盛土
2. 黒色土層 5YR (2/1) シルト質土層
3. 暗褐色土層 10YR (4/4) 浅間山麓下木炭層
4. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
5. 暗褐色土層 10YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
6. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層

7. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
8. 暗褐色土層 10YR (4/4) 浅間山麓下木炭層
9. 暗褐色土層 7.5YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
10. 暗褐色土層 10YR (3/3) 浅間山麓下木炭層
11. 暗褐色土層 5YR (2/1) シルト質土層

例 言

1. 本書は平成9年度に実施された以下の事業の報告書である。

- ①高崎市立佐野中学校体育館建て替えに伴う発掘調査
- ②高崎市倉賀野町字東上正六地内分譲住宅造成に伴う発掘調査
- ③高崎市新保町字八坂地内ガソリンスタンド建設に伴う発掘調査

2. 遺跡所在地・遺跡番号・面積・期間

〈上中居荒神Ⅱ遺跡〉 高崎市上中居町字荒神345番地

遺跡番号317 面積289㎡ 1997.7.14～7.28

〈倉賀野東上正六遺跡〉 高崎市倉賀野町字東上正六202番地ほか

遺跡番号307 面積879㎡ 1997.2.6～3.6

〈新保八坂遺跡〉 高崎市新保町字八坂1555-1, 1556-3番地

遺跡番号314 面積394㎡ 1997.5.28～6.12

3. 調査組織

〈上中居荒神Ⅱ遺跡〉

文化財保護課埋蔵文化財係

(事務局) 野尻弘 神戸聖語 村井田雅明 倉澤かおる

(調査担当) 久保泰博 吉田昌利

〈倉賀野東上正六遺跡〉

高崎市遺跡調査会

(事務局) 野尻弘 神戸聖語 村井田雅明 石田悦子 小林光子

(調査担当) 関口修

〈新保八坂遺跡〉

高崎市遺跡調査会

(事務局) 野尻弘 神戸聖語 村井田雅明 石田悦子 小林光子

(調査担当) 関口修 池田敏 神戸肇

4. 報告書の編集・執筆

〈上中居荒神Ⅱ遺跡〉 編集・執筆 吉田昌利

〈倉賀野東上正六遺跡〉 編集・執筆 関口修

〈新保八坂遺跡〉 編集・執筆 関口修

5. 事業における委託業者・協力者(敬称略)

〈上中居荒神Ⅱ遺跡〉 横田調査設計(測量) 高崎市立佐野中学校

〈倉賀野東上正六遺跡〉 横田調査設計(測量) 青高館(空撮) 飯島静男(石材同定)

五十嵐信 大塚初重 志村哲 田口一郎 西山克己 右島和夫 森田秀策

〈新保八坂遺跡〉 横田調査設計(測量) フジテクノ(空撮)

五十嵐信 長井正欣

6. 発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料は高崎市教育委員会が一括保管している。

凡 例

1. 図版中に使用した北は国家座標第IX系による座標北である。調査位置図及び遺跡図は、高崎市発行2,500分の1地形図及び20,000分の1高崎市金図を使用した。
2. 遺跡の土中に見られるテフラの供給火山と推定年代は次の通りである。
As-B 浅間山噴出テフラ（天仁元年、1108年）
3. 遺物図の縮尺は3分の1を原則とした。
4. 遺構の幅、深さは最大データである
5. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」を用いた。

目 次

I 上中居荒神II遺跡	1
第1章 経過と結果	
第1節 調査の経緯	1
第2節 立地と環境	1
第3節 遺跡の概要	2
第2章 検出した遺構	
第1節 浅間B軽石層下水田跡	3
第2節 中・近世水路遺構	4
写真	5
II 倉賀野東上正六遺跡	9
1. 発掘調査の実施と経過	9
2. 遺跡の立地	9
3. 既調査について	11
4. 検出した遺構と遺物	12
5. 調査の成果と課題	18
III 新保八坂遺跡	25
1. 発掘調査の実施と経過	25
2. 遺跡の立地	25
3. 基本土層	26
4. 検出した遺構と遺物	27
1. 浅間B軽石下水田跡	27
2. 道路状遺構	28

I 上中居荒神II遺跡

第1章 経過と結果

第1節 調査の経緯

高崎市立佐野中学校の体育館の建て替えが計画され、建設予定地に事前調査として、平成8年に試掘調査を行った。その結果、浅間A軽石層下水田跡及び浅間B軽石層下水田跡が確認された。平成8年末、建設担当者と文化財保護課との間で協議がもたれ、建て替えによって破壊される部分について発掘調査を実施することとなった。年度当初の発掘計画では、4月から調査を行い、調査終了後、体育館の解体を行う予定であったが、諸般の事情により発掘調査の日程が7月にずれ込んだ。その間に、調査対象地では、体育館が解体され基礎も抜かれて更地になっていた。調査対面機が当初より広がったように思われたが、基礎杭の撤去などによってかなりの部分の遺構が壊されてしまっていた。このため、破壊の免れた場所を選んで発掘調査を実施した。



図1 遺跡位置図

調査日誌抄録

平成9年7月15日 仮設事務所設置、各トレンチの掘削、浅間B軽石層を確認。
7月16日 トレンチで、畦畔と水路遺構を検出。
7月18日 2、3トレンチで湧水が多く排水のための溝掘りをする。
7月24日 各トレンチの浅間B軽石取りのぞきが行われ、各々から、畦畔が検出できた。
7月27日 両側開通の作業終了。
7月28日 調査終了。トレンチの埋め戻し及び仮設事務所撤去。



図2 迅速図

第2節 立地と環境

本遺跡は、高崎駅から南東1.3kmに位置する。島川と井野川の間の前橋高崎台地に所在する。当該地は、旧上中居村（現在の「上中居町」）の西側に広がる水田地帯であった。江戸時代は、高崎藩領に属し、石高は1289.032石であった¹⁾。鹿藩直領により、高崎県に入り、その後、明治4年10月に群馬県に編入された。明治10年の大小区制施行の時は第五大区第八小区に属した²⁾。また、明治16年の「町村一覧」には、上中居村三ヶ村、二百八十七戸、千五百二十人であったことが記録として残されている³⁾。明治22年4月から、上中居町は7村と合併して佐野村に一部となった⁴⁾。そして、昭和14年10月1日に佐野村は高崎市に編入された⁵⁾。上中居村が町になったのは昭和20年代半ばのことである。

1	上層土層
2	1. 盛土
3	2. (5YR3/1) 黒褐色粘土質層、浅間A軽石下水田跡。
4	3. (7.5YR3/3) 暗褐色砂質層、浅間B軽石の2次堆積層。
5	4. (7.5YR4/4) 褐色砂質層、浅間B軽石の2次堆積層。
6	5. (7.5YR2/2) 暗褐色砂質層、浅間B軽石層。
7	6. (10YR3/1) 黒褐色粘土質層、浅間B軽石下水田跡。
7	7. 洪水層

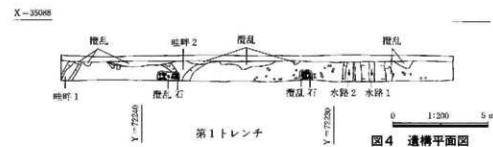
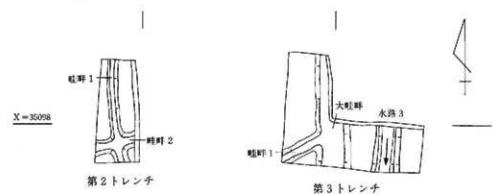
図3 基本土層図

浅間B軽石層下水田跡関係で、本遺跡の周辺に位置する遺跡として、下中居条里遺跡、下之城村東I・II遺跡、下之城村前II遺跡、下之城村北II遺跡、高間東沖II遺跡、岡久保遺跡、岩坪I・II遺跡、上中居荒神I遺跡、上中居平塚I・II遺跡、上中居炭地蔵遺跡、上

中島島薬師道跡、矢中村西Ⅰ遺跡、栄町Ⅰ遺跡等がある⁹⁾。

第3節 遺跡の概要

調査の経緯の所でも触れたが、基礎杭を抜いたために遺構の残された場所が限られたものになってしまった。できるだけ遺構の残りのよさそうな箇所を3ヵ所見つけてトレンチを設定した。設定したトレンチを第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチとした。



されたものと思われる。浅間A軽石層下水田跡の検出を断念し、浅間B軽石層下水田跡を検出べく、掘り下げた。地表60cmのところで良好に堆積している浅間B軽石層を検出した。浅間B軽石層は5cmでそれより厚く堆積はしていなかった。3ヵ所のトレンチとも同じ高さから浅間B軽石層が検出された。また、第1トレンチと第2トレンチで、浅間B軽石層下水田跡に作られた中・近世の水路遺構を検出した。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

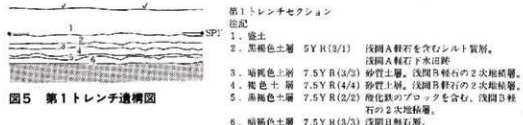


図5 第1トレンチ遺構図

第1トレンチでは、試掘結果を系に、慎重に表土削削を行い、浅間A軽石層下水田跡の検出を試みた。しかし、わずかに浅間A軽石の堆積と黒色粘土質土壌（水田土壌）を確認することができたが、削平が甚だしく水田面を検出することができなかった。おそらく、現在の体育館を建設するときに削平

されたものと思われる。浅間A軽石層下水田跡の検出を断念し、浅間B軽石層下水田跡を検出べく、掘り下げた。地表60cmのところで良好に堆積している浅間B軽石層を検出した。浅間B軽石層は5cmでそれより厚く堆積はしていなかった。3ヵ所のトレンチとも同じ高さから浅間B軽石層が検出された。また、第1トレンチと第2トレンチで、浅間B軽石層下水田跡に作られた中・近世の水路遺構を検出した。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

また、この水路は、南北に伸び、第1トレンチと第3トレンチで見つかった水路は、一続きのものの一部であると思われる。浅間B軽石層をはがし、水田面にまで達すると地下水が表面から浸みだし、壁際に沿って排水用の溝を切らなければならなかった。

浅間B軽石層下水田の下層は、Hir S起源の洪水層である。

第2章 検出した遺構

第1節 浅間B軽石層下水田跡

浅間B軽石層下水田跡は、3つのトレンチから検出された。以下第1、2、3トレンチの順で紹介する。

・第1トレンチ

第1トレンチは、長さ20m、幅1.4mの東西に長いトレンチである。第1トレンチでは、畦畔が2条と水路遺構が2条、検出された。

水田表面は、凹凸が見られるが、人或いは動物等の足跡かどうか判別ができない。調査区に西端付近で検出された畦畔で、黒褐色粘土質土壌1層からできている。北東から南西に伸びる畦畔で、断面の形態は上部が平らな、押しつぶされた漏斗型である。畦畔の下場は60cm、上場は30cm、高さは2cm、畦畔を挟む東西の高低差は1cmであった。

畦畔2は、調査区の中央部付近で検出された畦畔で、一部が乱れで壊れているが、2条の畦畔が「ト」の字型に交差している畦畔である。断面の形態は、畦畔1と同じである。測定可能な範囲での値であるが、上場は46cm、下場は120cm、高さは5cm、畦畔を挟んだ東西の高低差は2cmであった。水路は検出できなかった。

調査範囲がきわめて限定されていたため、水田面の長軸がどの方向を向いていたか、1面の面積がどの程度であったか、水田面の傾き等明らかにできなかった点が多い。水路遺構については、第2節で述べる。

・第2トレンチ

第2トレンチは、縦5.4m、横1.8～2.4mの南北に長い長方形に設定したトレンチである。このトレンチでは、南北に伸びる畦畔1とは東西に伸びる畦畔2を検出した。2条の畦畔は南壁付近で交差している。

水田の表面は、凹凸が少なく、比較的残りのよい凹凸を見ても人或いは動物の足跡などの判別がなかった。畦畔1の断面の形態は、つぶれた漏斗型である。交点より北側の下場は56cm、上場は20cm、畦畔を挟んだ東西の高低差は1cmである。また、交点の南側では、上場は30cm、下場は80cm、畦畔を挟んだ東西の高低差はほとんどなかった。水路は検出できなかった。

・第3トレンチ

第3トレンチは、北東部の約1/4が壊されていたため、「L」字型の調査区の設定となった。このトレンチでは、2条の畦畔と水路遺構を検出した。

畦畔は、南北と南西～北東に伸びる畦畔である。畦畔は平低で、押しつぶされた漏斗型である。畦畔の上場は

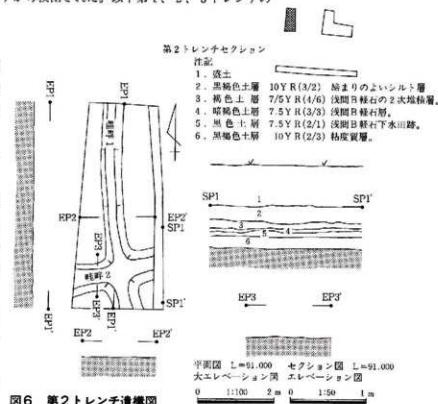


図6 第2トレンチ遺構図

116cm、下場は180cmであった。水路の西側の水田面に浅間B軽石で埋まった小穴があったが、人や動物の足跡でもなく、鋤の跡でもなかった。

第2節 中・近世水路遺構

水路遺構は、第1トレンチと第2トレンチで検出した。いずれの水路遺構も、水田面から掘り始め、下層の洪水層を掘り込んで作られたものである。水路を埋めた埋土には、浅間B軽石を含む土壌が含まれている。第1トレンチでは、2条の水路で、水路2は水路1の西側に水路1に平行するように位置し、南北に伸びている。水路1は、上場が120cm、下場30cm、掘り込み面からの深さが32cmであった。水路2は上場が70cm、下場が40cm、掘り込み面からの深さが36cmであった。水路1、2の形態は上部が広がったU字型である。水路の新旧は水路1の方が水路2よりも古いと考えられる。調査範囲が狭かったため、水路2は独立に作られたものか、水路1から枝分かれして作られたものかは不明である。

水路3遺構は、第3トレンチで検出された。水路の上場は145cm、下場は55cm、掘り込み面からみ面からの深さは30cmであった。又、水路の形態は、上部が開いた浅いU型である。

水路1と水路2との関係では、検出した位置から、一連の水路ではないかと思われる。水路1と水路3との高低差は5cmあった。

参考文献

- 1) 木村 徳校訂「旧高田領取調帳」 関東編 日本史料選書3、近藤出版社 p468
- 2) 高崎市史編さん委員会編 (1969) 高崎市史 第二巻「大小区制」高崎関係の大小区 p59
- 3) 同書「戸長役場と所管人口」 p62
- 4) 同書「町制施行」 泉令の公布 p69
- 5) 同書「町村合併と境界変更」 佐野村合併に関する件 (群馬県告示第四四三号) p89-90
- 6) 金子(1997) 上中居荒神1遺跡、高崎市遺跡調査会報告書第62集、高崎市遺跡調査会

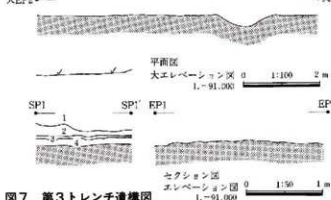
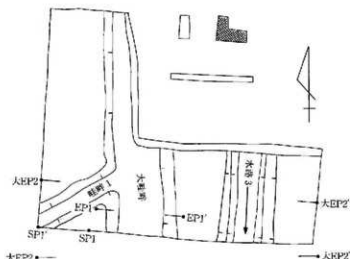


図7 第3トレンチ遺構図

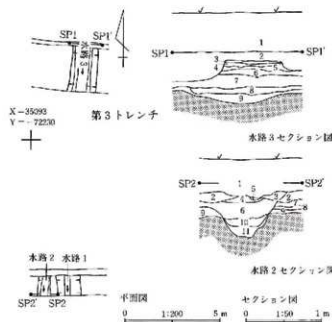


図8 中近世水路遺構図

写真1 第1トレンチ全景

(東から)

掘削が多く、遺構面の状態もあまり良くなかったが、中央部と西壁付近で畦畔を検出した。



写真2 第1トレンチ

南壁セクション

(北から)

一部に浅間A軽石層下の水田上張りが見られたが、遺存状態は極めて悪い。しかし、浅間B軽石の堆積状態は良かった。



写真3 第1トレンチ

水路1及び水路2

(東から)





写真4 第1トレンチ
水路1南壁セクション
(北から)
半分か攪乱を受けていたが、水路にまでは及んでいなかった。



写真5 第1トレンチ
畦畔出土状況
(東から)



写真6 第2トレンチ全景
(北から)
浅間B軽石を取り除いた所で、湧水があり、溝を付けた。
畦畔は、厚みがなく平低である。



写真7 第2トレンチ東壁
セクション
(西から)
第2トレンチでは、浅間A軽石下水田の確認はできなかった。
最下層は、洪水層である。



写真8 第3トレンチ
水路3と畦畔出土状況
(東から)
浅間B軽石を取り除いた所で、湧水があった。
浅間B軽石層の直上まで、攪乱が及んでいた。



写真9 第3トレンチ
畦畔出土状況
(北西から)
水田面に凹凸があるが、人或いは動物の足跡か否かは分からない。



写真10 第3トレンチ西壁
セクション
(東から)
浅間B軽石の直上まで攪乱を
受けている。



写真11 水路3出土状況
(北から)
水田面から洪水層に掘り込ま
れている。水路の右側に棒で突
いた穴があるが、どうしてでき
たのかは分からない。



写真12 第3トレンチ
水路3北壁セクション
攪乱を受けなかった部分に浅
間A軽石下水田土層が見られ
た。溝の埋土は、浅間B軽石を
主体とする砂質土壌である。

II 倉賀野東上正六遺跡

1. 発掘調査の実施と経過

1. 調査に至る経過

(1)調査に至るまで

本遺跡は、高崎駅から南東に3km、倉賀野町字東上正六にある。国指定史跡浅間山古墳北側の位置にあたる。前年度の調査で、浅間山古墳の範囲は指定されている極までなく、中堤が確実であり、その外側はかなり幅広く低い部分が存在し、外堤が存在することが充分確認された。今回、分譲住宅造成が申請された開発地は、平成7年度に調査した西側であり、連続して遺構が存在する可能性が高い場所である。そのため、高崎市教育委員会では平成8年12月に遺構の有無を確認するため試掘調査を行った。試掘調査の結果、古墳の堀及び堀の立ち上がりを確認した。高崎市教育委員会では、試掘調査で確認された堀が浅間山古墳の外堀である旨を開発者に伝え両者で協議した。外堀は浅間山古墳の一部であり、その対応は苦慮するものであった。しかし、開発地であるこの外堀位置は史跡指定の範囲外であり、緊急な指定追加も不可能であった。高崎市教育委員会では、やむをえず遺跡の調査を行って記録保存することとなった。

(2)調査の経過

平成9年2月6日、調査開始。引越越し安全確保。2月7日、対象地の掘削開始。2月10日、杭打ち雲石作業、堀底確認。1トレンチ、堀の立ち上がり部分を西に拡張、3トレンチと名付ける。2月13日、1トレンチ東を拡張4トレンチとする。1・3・4トレンチとも堀の立ち上がりに近い部分に土器多く出土。2月19日、2トレンチ北端調査、外堤とみられた高まりは堀と田の段差である可能性が高い。2月21日、2トレンチ北端、1溝調査、近世の水路か。2月25日、空中写真撮影。遺物取り上げ、実測。2月26日、4トレンチ古式土師器、右製模造品の剣、須恵器釜・蓋とまって出土。2月28日、4トレンチ写真撮影、実測。3月6日、遺構図面終了。埋め戻し開始。発掘調査終了。

2. 調査の方法

試掘調査で、浅間山の外堀とみられる遺構の堀底及び立ち上がりを確認していた。なお、堀底の上層には天仁元(1108)年噴出の浅間B軽石が堆積していた。試掘調査で浅間B軽石下の状態を精査したところ、古墳に向かってゆるやかによって傾斜している。また、雨のようすは一般的に水田と違ってかなり平坦で畔も検出されなかった。よって、浅間B軽石下に遺構はないと判断した。調査は分譲住宅の道路部分とし掘削機を用いて上部の土を除去、その後人力によって精査した。

測量にあたっては、国家座標ならびに水準点の杭打ちは業者に委託した。平面図は1/40の縮尺で、地層図ならびにエレベーション図は、1/20の縮尺で作成、写真は35mmリバーサル並びにモノクロフィルムを併用した。

2. 遺跡の立地

1. 遺跡の地理的歴史的環境

本遺跡(1、倉賀野東上正六遺跡)は高崎駅から南東3kmの位置にある。遺跡の西側は崖で、また遺跡地の東側は東に向かって微高地が広がる。遺跡地の北側は、浅間B軽石下水田が数カ所で確認されており、かなり広い範囲の低地と考えられる。本遺跡は昭和2年に国指定史跡となった浅間山古墳(2)の北側となる。浅間山古墳は北に後円部、南が前方部の墳丘約171mの古墳で、高崎市では第1位、群馬県でも太田天神山古墳に次ぐ大きさを誇る。発掘調査はされていないが、表層される墳輪から4世紀末ないし5世紀初めの築造とされている。また、南東約700mの位置には、墳丘長約123mの大鷲巻古墳(3)がある。浅間山古墳同様、昭和2年に国指定された前方後円墳である。調査はされていないが、4世紀末から5世紀初めと推定されている。大鷲巻古墳の北には、やや規模の小さい前方後円墳の小鷲巻古墳(4)がある。主体部は舟形石棺とされ5世紀後半と考えられている。浅間山古墳

と大鶴巻古墳の西側は崖となっており、その崖に
 かつて柏沢川が流れる。柏沢川の西は入門墳の大
 山古墳(5)や茶臼山古墳(6)がある。古墳前期の集落
 跡は、倉賀野万福寺及び倉賀野万福寺II遺跡(7)、
 下佐野I・II遺跡(8)などで調査されている。

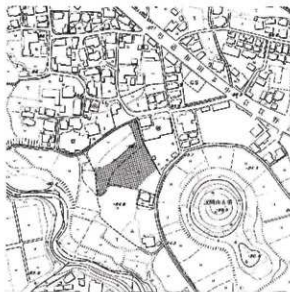


図9 調査位置図



図10 周辺の遺跡図

3. 既調査について

今回対象地東では、平成7年度の調査(倉賀野東上正六317ほか)によって浅間山古墳の中堤と外堤の存在を確認した。中堤は推定幅9~10m、外側に葦石がある。葦石は10cm程度の河原石を主体に堀底まで葦ていた。中堤の上面と堀底の段差は0.40~0.60m堀底はほぼ平坦であった。外堤の立ち上がりを確認しようと40m程度延長したが、外堤の立ち上がりは確認できなかった。外堤はかなりの規模をもつとみられた。

なお、平成7年度調査と今回の中間部分では、平成6年に試掘調査を行い、浅間B葦石の黒色粘性土の存在を確認しているものの遺構を特定できなかった。また、後門部東では平成5年度に試掘を行ったが遺構・遺物は確認されていない。

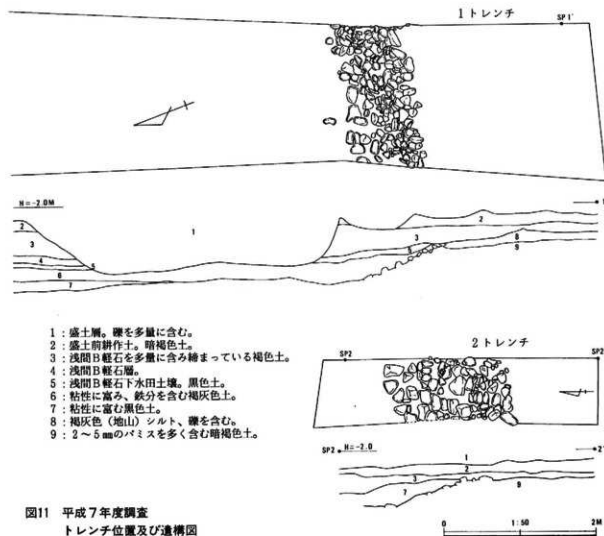
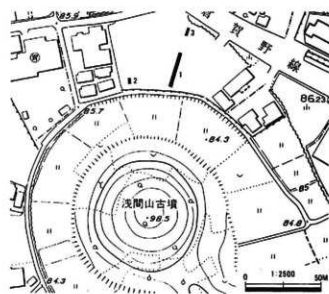


図11 平成7年度調査
 トレンチ位置及び遺構図

4. 検出した遺構と遺物

1. 1・3・4トレンチ

開発対象部分のうち道路予定地部分を調査対象範囲としトレンチを設定、南側のトレンチが1トレンチ、北側が2トレンチである。1トレンチは長さ約50m、調査により西隅で堀の立ち上がりを確認した。よって、さらに南に3トレンチを設定、同じく北に拡張した部分を4トレンチと名付けた。調査によって、浅間山古墳の後門部とほぼ同心円状に堀が立ち上がるのを確認出来た。立ち上がり部で段差0.90m、1トレンチの浅間山古墳墳丘寄りでは0.95mの深さとなる。立ち上がり部はかなり緩やかである。堀底は若干の凹凸はあるものの全体的には平坦で東に向かって低くなっていく。堀底上部は褐灰色・黒褐色である。粘性が高い上で長い年月経過であったと考えられる。その30cm程上層は、浅間B軽石の純層が堆積している。浅間B軽石の下面は幾分凹凸はあるものの堀底にそって東に傾斜し、かつ畔跡も確認されない。水田としては利用されなかったと考えられる。堀の立ち上がり部では粘性の強い黒褐色土の上層に、井野川泥流起源の径2～5cm程度の礫、黄色土粒を含む土層がある。外側から堀に土が落ち込む様子である。しかし、崩土の量は少なく外側に外堤の盛土があったとは判断しがたい。なお、堀が立ち上がる場所では遺構面の直上が表土であり、既に古墳時代の土層は削平されていると考えられる。

堀が発見された部分は現在水田であるが、この外側にはあたかも堀に沿うような帯状の堀がある。この堀は外堤の形にも見え、地下の遺構が反映されていると調査前は推定していた。しかし、1トレンチ部分では、帯状の堀は堀の立ち上がり部分からかなり遠く、また帯状の堀と堀の立ち上がりは同心円ではない。

出土遺物は、浅間B軽石下の褐灰色・黒褐色土中から古式土師器の出土が多い。出土位置は、堀の立ち上がり部分から多く遠くても15m程の位置である。よって、これらの土器は堀の外から流れこんだか、放り込まれたと考えられる。4トレンチでは、石製模造品の剣17点が1.5m程の範囲にまとまって出土している。堀の立ち上がり途中であり、堀底に近い。古式土師器は殆どが堀底か、もしくは底に近い位置である。

2. 2トレンチ

2トレンチは南北に設定し長さ65m、北隅から15mの位置で堀の落ち込みを確認した。堀の北側つまり外側はかなり削平を受け井野川泥流層まで達している。堀の立ち上がり部もかなり削平され、堀底との段差は0.4mである。2トレンチ北隅付近では削平が比較的少なく、井野川泥流直上の黒色土が残っている部分がある。ここでの高さを基準とすると、堀立ち上がり部での堀底との段差0.6m、2トレンチ最南の堀が最も深い場所との比高差は0.9mとなる。堀底は幾分の凹凸があるが、概ねフラットである。堀を埋める土は、粘性が非常に高く土の粒子の細かい褐灰色・黒褐色土が堆積している。なお、底から約12～15cm上では、浅間B軽石純層が堆積し、その上は砂質土層、表土の順となる。浅間B軽石が降下するまでの間、堀は自然堆積で人が手を加えた様子は認められない。なお、浅間B軽石下層は水田跡の様相は認められない。

外堤は調査では確認出来なかった。外堤の盛土が堀に落ち込んだ可能性もあるため、セクションをとった。立ち上がり部の土層は黄色土粒子を含む土で、外側から土が落ち込んだ様子が認められる。しかし、堀の外側が20cm以上削られていることもあり、土層中の黄色土粒子が外堤の盛土から削られた土かは判断しがたい。2トレンチ北隅に接して、堀が外堤状に巡り内側が水田となっていた。2トレンチ西の上層の観察では、現在の堀の高まりの部分で土が井野川泥流まで削られている。この削った位置と堀と水田の境がぴったり一致している。外堤状に見える堀の高まりは、外堤部分ではなく、後世に堀と水田を画したため出来た地割りと考えられる。2トレンチ北隅では幅3.5m+α、深さ63cmの近世溝（1溝）がある。埋没土は水成堆積であり、水路と考えられる。溝下部からは、17～18世紀の陶磁器が出土している。1溝の上部には現代溝、2溝が走る。幅50～70cm、深さ9～15cmである。なお、2溝の南にある土坑は、覆土に浅間A軽石を含む。近世後期以降のものである。

遺物は浅間B軽石下層から、数片の土器が出土したにすぎない。埴輪はなく、古式土師器の破片のみである。

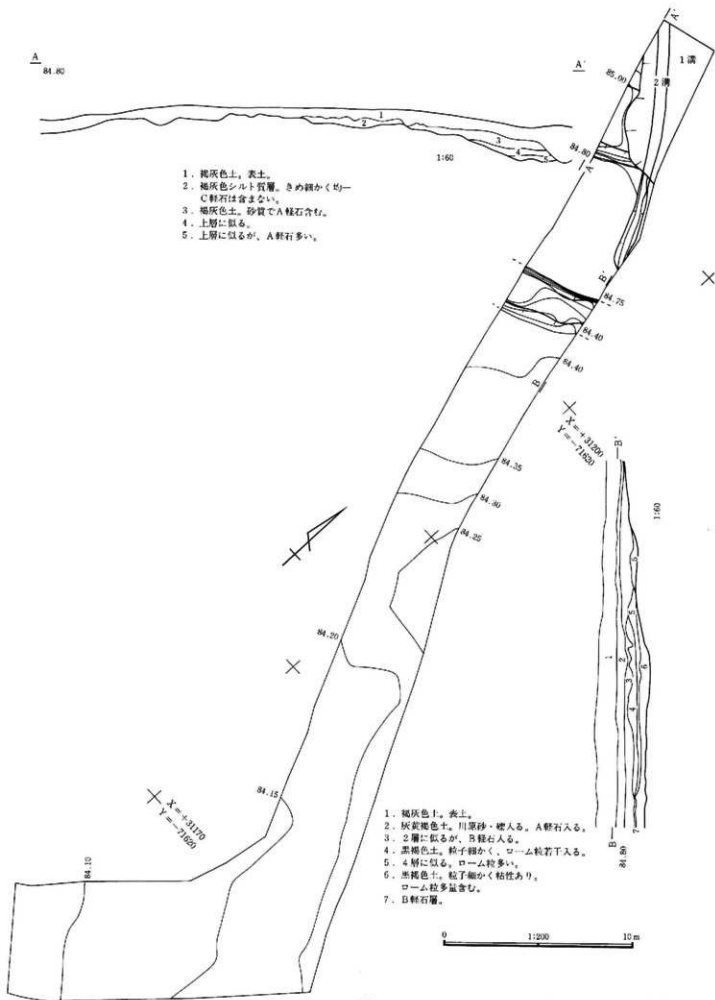


図13 2トレンチ遺構図

3. 出土土器について

土器は浅間B軽石下の暗褐色土中からが大部分で、堀の立ち上がり近く、また堀底に接したのが多い。

1～5まではS字状口縁付甕である。口縁の屈曲は弱く、胴部の外面はハケ調整である。器内は全体的に薄い。6は甕の口縁部で直線的である。体部はないがかなり丸みのある甕であろう。7は壺の口縁部である。やや内弯気味に立ち上がる。ひさご形壺の口縁と考えられる。8は鉢である。胴部外面はヘラケズリ調整で、器内は薄い。9はやや大型の小型丸底甕である。胎土には細砂を多く含み、やや粗雑なつくりである。10は小型のS字状口縁付甕である。外面はハケ調整、内面は縦方向にユビナデ調整されている。11は器台の受部である。内外面とも丁寧にヘラミガキされている。12は器台、上下二段に透孔が見える。たて方向に丁寧にヘラミガキされている。13と14はともに器台である。両者とも外面は丁寧にヘラミガキで、14はかなり脚部が開く。15は台付甕の台部である。外面にハケ調整は認められない。16は高環である。外面はヘラミガキ、内面はユビナデによる。17と22は須恵器の蓋である。両方ともリング状のつまみがつき、体部はハの字形に開く。18は須恵器の坏身である。口縁は小さく立ち上がる。19と20は須恵器の坏である。体部は湾曲しながら立ち上がり、底部は不定方向のヘラケズリ調整である。21は土師器の坏である。口縁は比較的真直的に立ち上がり内傾は殆どない。23は須恵器の甕、胴部内面には同心円の当て痕が見られる。

1～16までは古式土師器の範疇で、4世紀のものが主体である。17、19、20は7世紀の須恵器、21は8世紀段階の上埴器である。浅間B軽石下で、図化した以外の土器でもこれより時期の下る土器はない。

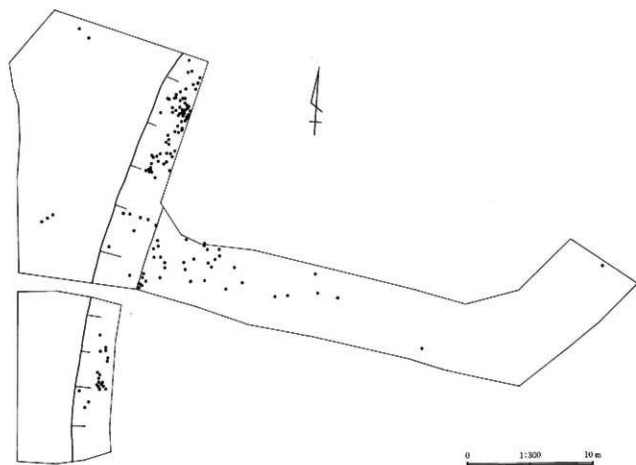


図14 土器出土位置図

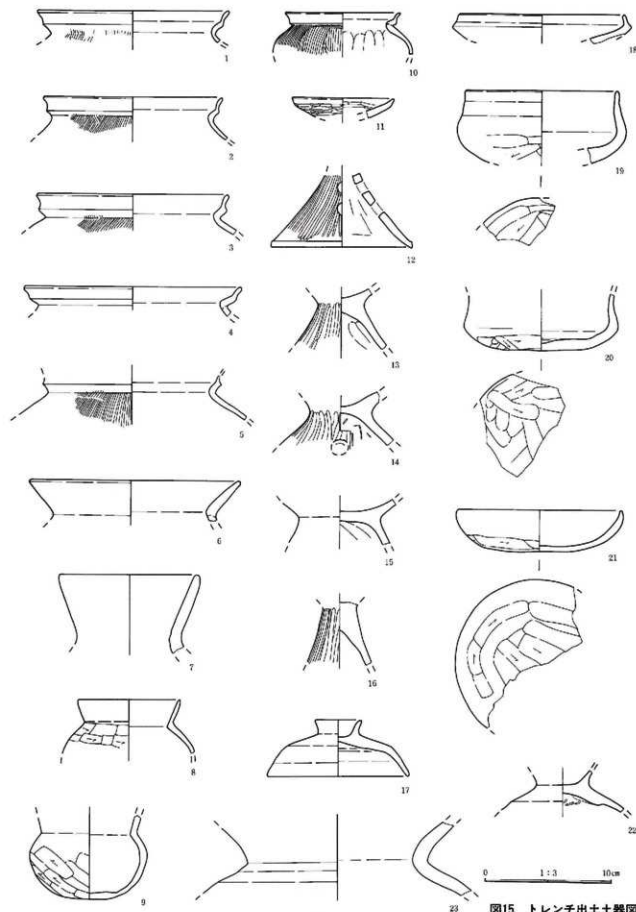


図15 トレンチ出土土器図

4. 石製横造品の出土

24～40の石製横造品は、1トレンチの北に拡幅した4トレンチで出土している。出土位置は埋込に接したものと、わずかに間層があるものとがあり1.5m×0.5m程度の範囲に比較的多く出土している。石製横造品は合計で17個体、すべて剣形である。

24は長さ6.8cm、幅2.8cm、厚さ5mm。孔は1.5mmでやや端によっている。全体に丁寧に研磨。やや緑に近い。25は長さ4.9cm、幅2.0cm、厚さ3.5mm。研磨は横方向。26は長さ4.5cm、幅1.9cm、厚さ4mm。27は長さ4.6cm、幅1.8cm、厚さ4mm。28は長さ4.9cm、幅1.7cm、厚さ3.5mm。たて方向に研磨。やや緑がかった。29は長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ4mm。やや淡い色。30は長さ3.5cm、幅1.4cm、厚さ3.5mm。片側がカーブを描き先はとがる。31は長さ3.3cm、幅1.7cm、厚さ4mm。上部は研磨されていない。32は長さ3.9cm、幅1.6cm、厚さ3mm。上部がとがり、片側がカーブを描く。33は長さ3.0cm、幅1.8cm、厚さ3.5mm。上と下とは未研磨でやや淡い色。34は長さ2.9cm、幅1.9cm、厚さ2mmと薄い。35は長さ3.8cm、幅1.8cm、厚さ4.5mm。丁寧に研磨。36は長さ3.2cm、幅1.7cm、厚さ4mm。片側がカーブを描き、先端がややとがる。37は長さ3.6cm、幅1.7cm、厚さ3mm。上部の研磨がやや粗雑。38は長さ4.0cm、幅1.5cm、厚さ3.5mm。緑色を帯びる。39は長さ3.2cm、幅1.9cm、厚さ3.5mm。先端は未研磨。淡い色をしている。40は長さ4.5cm、幅1.7cm、厚さ4mm。研磨は比較的粗雑で淡い色である。

石製横造品はすべて溶石製であるが、全体的緑色に近くやや硬質で研磨も丁寧である。これらの石製横造品は、5世紀後半段階の祭祀遺物とみられ、浅間山古墳への祭祀が継続していたと考えられる。

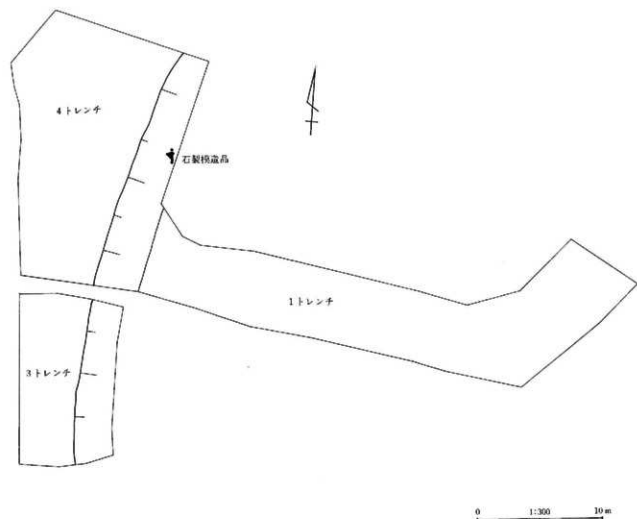


図16 石製横造品出土位置図

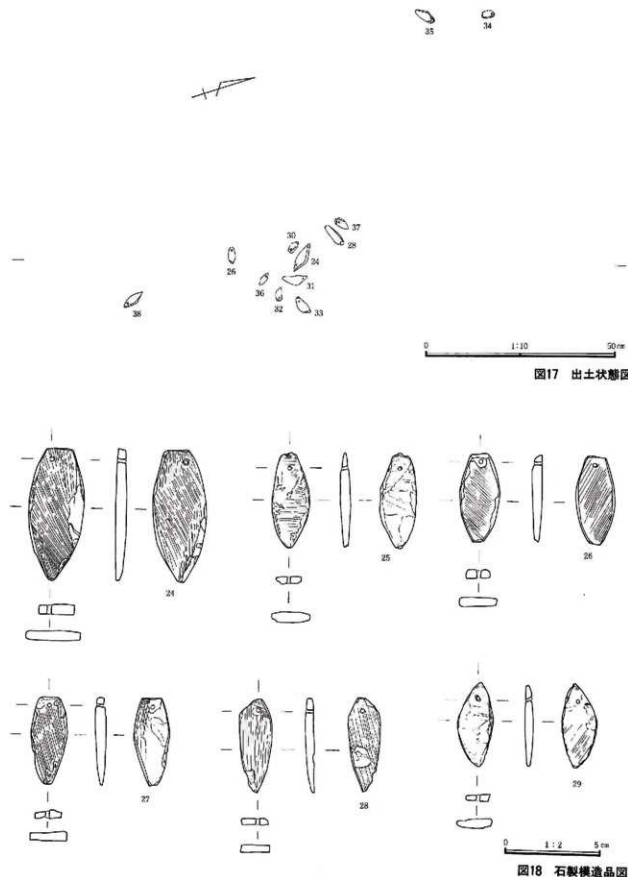


図18 石製横造品図

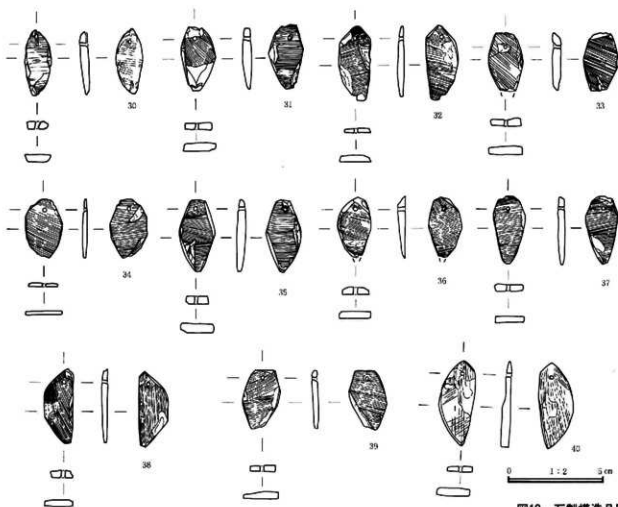


図19 石製製造品図

5. 調査の成果と課題

浅間山古墳は、墳丘長約171m、後円部径約105m、前方部幅約75mの大前方後円墳である。史跡指定されているのは内堀までだが、平成7年度の調査によって、その内堀の外側に幅10m程度の中堤と外堀が存在していることが判明した。また、今回の調査では外堀の立ち上がりを確認し、堀の範囲確認が出来た。平成7年の調査では中堤と外堀の葺石を調査したが、今回は対象地が中堤部分までは含まれない。

内堀部分は、現在は水田であり幅26～30mで墳丘に沿って円形に巡る。中堤は平成7年度調査によれば外側に葺石を持ち、中堤上面と堀底の段差は0.40～0.60mである。中堤外側部分と浅間山古墳後円部裾の距離は約35mであることから、中堤幅は9～10mと推定される。中堤位置及び幅が今回の調査の場所でも同一と考え図上で測ると、外堀は2トレンチ部分で上幅56m、1トレンチでは65mとなる。2トレンチ立ち上がり部は葺石はなく0.6mの段差、南の最深部で0.9m。1トレンチの立ち上がり部も葺石はなく段差0.90m、最深部では0.95mの深さである。外堀立ち上がり部の外側は、2トレンチの一部を除いて基盤である井野川泥流まで削平され、外堀は確認出来なかった。また、地層にも外側から盛土が落ち込んだ様相は確認されなかった。調査では、外堤の存在を積極的に示すものはなかった。しかしトレンチ2本だけからの所見であり、外堤の有無の判断は出来ない。

浅間山古墳に、中堤及び幅50～60m以上の外堀が後円部付近を巡っていたことは、平成7年度と今回の調査によって確実となった。浅間山古墳の前方部でも外堀が存在する可能性が高く、古墳の規模は壮大なものとなる。これまでの調査によって、かつて史跡指定された部分だけが浅間山古墳の範囲ではないことから、今後浅間山古墳の保存整備事業に再考が必要である。

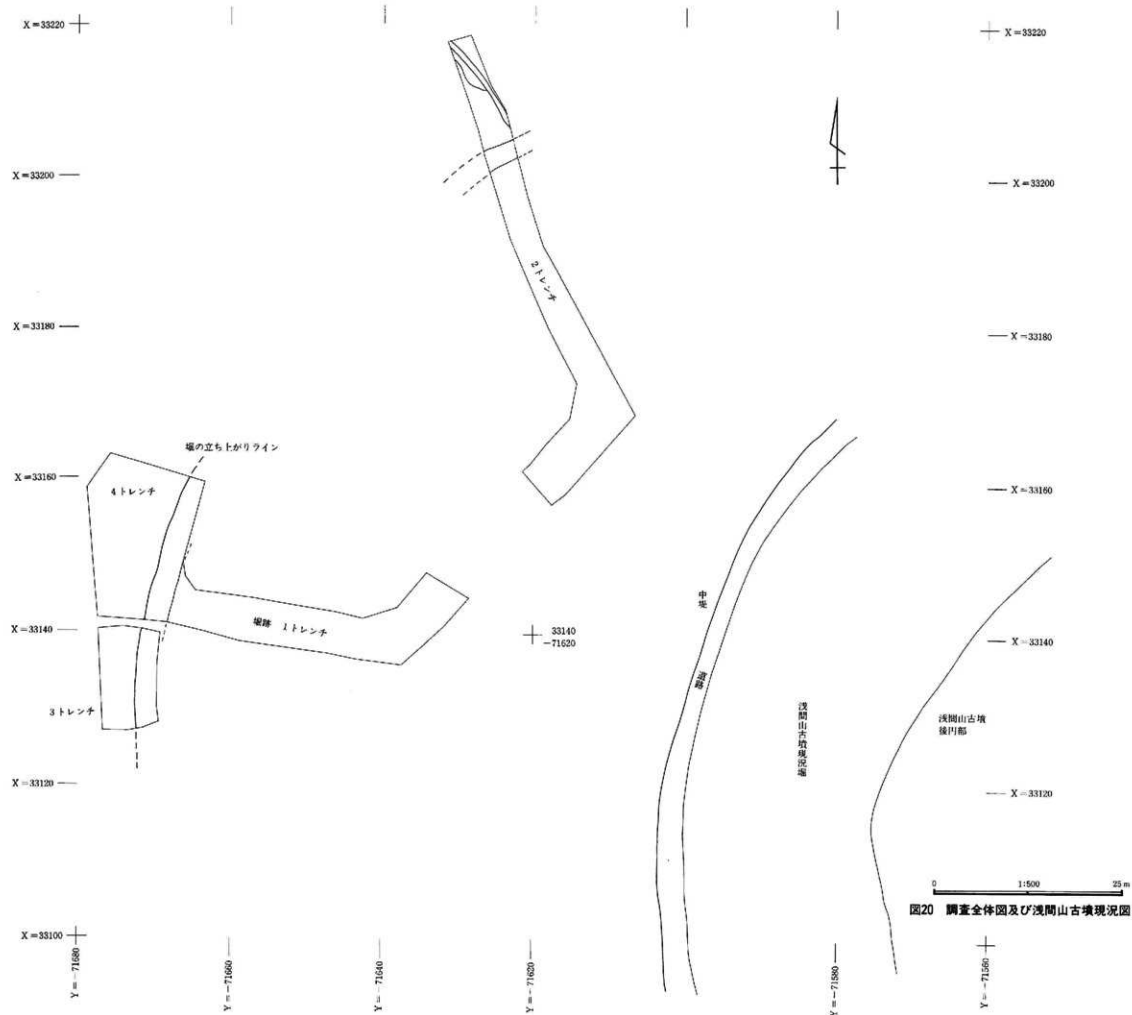


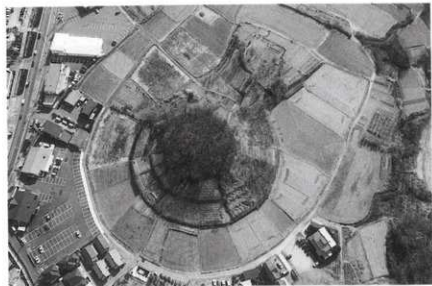
図20 調査全体図及び浅間山古墳現況図



浅間山古墳と調査区



浅間山古墳 右下が北



浅間山古墳 北西から



外堀の様子 東から
1トレンチ、左が3トレンチ
右が4トレンチ



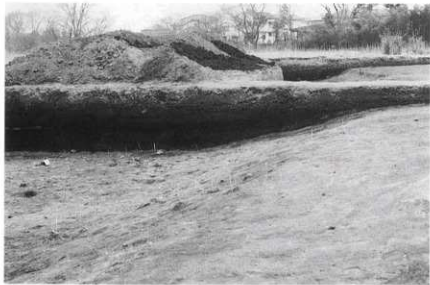
浅間山古墳後円部
左上が調査地点



同上 北から



大鶴巻古墳と小鶴巻古墳
右が北



外堀接写 北から



外堀調査の様子
手前が3トレンチ
作業は1トレンチ



2トレンチ外堀立ち上がり付近
南から望む



外堀調査 1トレンチ



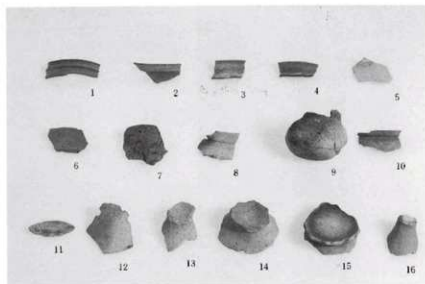
1トレンチ堀底面
土器出土状況



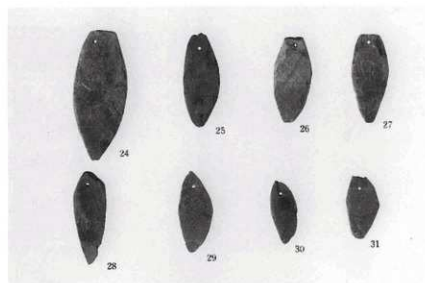
1トレンチと拡張区 南から



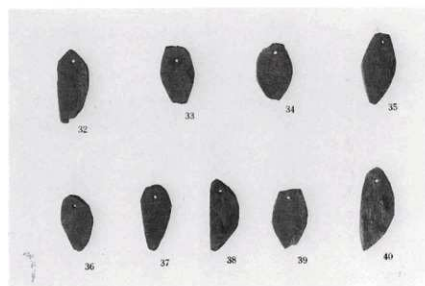
4トレンチ
石製機造品出土状況
北から



3 トレンチ出土古式土師器



4 トレンチ出土石製模造品



III 新保八坂遺跡

1. 発掘調査の実施と経過

1. 調査に至る経過

(1) 調査に至るまで

本遺跡は、高崎駅から東北東約3.5km、新保町八坂にある。県道高崎・駒形線に面している。この場所にガソリンスタンド建設の計画が立てられ、高崎市教育委員会では遺構の有無を確認するための試掘調査を行った。その結果、浅間B軽石層下で水田跡を検出、さらに水田面の東と西とに平行する窪みを確認した。そして、下層にも溝状遺構が存在すると判断した。スタンドのタンク設置、及び店舗建設によって遺跡が消滅することは明らかであり、スタンド建設業者と協議を重ねた。しかし、事業は既に進行中であり、遺跡の発掘調査を行い記録保存することで合意した。市教育委員会では、高崎市道跡調査会に職員を派遣し調査を行うこととした。

(2) 調査の経過

平成9年5月28日、調査開始。重機による掘削開始。5月30日、浅間B軽石層下下面において、平行する南北方向の溝状の窪みあり。6月3日、浅間B軽石を除去し、水田面の精査継続する。6月4日、浅間B軽石下水田跡全体写真撮影。6月6日、遺構の図面開始する。6月9日、水田下層を掘削、道路状遺構及び側溝検出。6月10日、遺構精査。側溝及び道路状遺構上面より土器が出土する。6月11日、写真及び道路状遺構の図面。6月12日、調査終了。

2. 調査の方法

試掘段階で天明3年噴出の浅間A軽石純層の存在は認められなかったため、浅間B軽石層の直上で掘削機を用いて土を除去した。浅間B軽石層下部は遺構の残存状態がよく、人力によって精査した。この面の調査終了後、下層の調査をおこなった。平行する窪んだ溝は下層に道路状遺構の側溝が存在したためであり、精査かなり苦労した。対象地及び周辺は現在水田として使われている。調査時は田植え前であったが、かなり水位の高い場所である。よって、調査時の排水は仮設電柱を設置し水中ポンプで排水した。

国家庫裡ならびに水準点の杭打ち作業は業者に委託した。測量はこの杭を基準とし、平面図は1/40の縮尺で、地層図ならびにエレベーション図は1/20の縮尺で作成した。写真は35mmリバーサル巻びにモノクロ、カラーフィルムを併用した。

2. 遺跡の立地

1. 遺跡の地理的歴史的環境

本遺跡(1. 新保八坂遺跡)は高崎駅から東北東の位置にある。遺跡の南約300mには利根川の支流である井野川が東に、西約400mには袋谷川が南に向かって流れている。袋谷川の両側は自然堤防でやや高く、また遺跡地から東へ200m程の地点からやや広い微高地となる。本遺跡は、これら東西の微高地に挟まれた低地部にあたる。

付近に旧石器時代の遺構・遺物の出土はない。縄文時代は、元島名瓦井遺跡(2)で草創期の尖頭器が1点出土している。井野川左岸の矢島町村西遺跡(3)、井野川右岸では宿大類万相寺(4)、宿大類村西遺跡(5)で住居跡が調査されている。弥生時代では、後期の住居跡が宿大類万相寺、宿大類村西遺跡で調査されている。また、西島相ノ沢遺跡(6)では、弥生後期から古墳前期への過渡期の環壕集落が発見されている。古墳時代では、前期の方形周溝墓が宿大類村西遺跡でみつまっている。また、古墳中期の住居跡が多数、西島相ノ沢遺跡で調査されている。また、高崎情報団地遺跡(7)では5世紀後半の帆立貝式古墳や円墳が発見されている。奈良・平安時代の集落は宿大類天田・川俣(8)、宿大類万相寺、宿大類村西遺跡など数多い。西島IV遺跡(9)では、大溝から木製の人形と甕車が、平安時代の5号住居跡からは炉跡とみられるピット・埴輪・羽目・鋳型が出土している。なお、高崎情報団地遺跡では、道幅9m前後で側溝をもつ東山道と推定される道路状遺構が発見されている。



図21 周辺の遺跡



図22 調査位置図

3. 基本土層

1 トレンチ道路状遺構部分の土層柱状図である。4 は史料上から天仁元（1108）年噴出と推定されている浅間B軽石層。5 はやや粘性のある層、上部は腐植し黒ずんでおり、水田耕作土と考えられる。6、7 はシルト質で洪水起源と考えられる。8 は褐灰の粘質土、9 は前掲泥流堆積層であろう。

1. 褐灰色土。表土。
2. にぶい黄褐色土。鉄分多い。
3. 褐灰砂質土。浅間B軽石多い。
4. 浅間B軽石層。
5. 褐灰粘質土。上部は黒みを帯びる。
6. 灰褐色土。シルト質。
7. 褐灰色土。シルト質でやや粘質土ブロック含む。
8. 褐灰粘質土。
9. 褐灰色土。上部はシルト・粗砂主体。下部は粘土質。

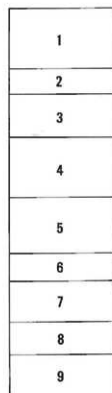


図23 土層図

4. 検出した遺構と遺物

1. 浅間B軽石下水田跡

調査対象地西にL字形に1トレンチ、東に南北方向の2トレンチを設定した。その結果、全面に天仁元（1108）年噴出の浅間B軽石層があり水田跡を覆っていた。1トレンチでは、調査区南西にTの字形に東西と南北方向の畔を確認した。東西畔は北79度西、畔幅0.45～1.1mであるが、高さ2～5cmとかなり扁平である。南北畔は北2度東と、ほぼ真北を向くが畔幅0.55～0.7m、高さ2～3cmとこれも扁平な小畦畔である。1トレンチ中央には、12～13cmの段差があり東が高い。段差部分は上部が削平されているが、ここに南北方向の畔があったと考えられる。1トレンチ東端でも8cmの段差があり、東の水田面へと続く。この部分も上面が削平されており、かつては北15度東を向く畔があったとみられる。浅間B軽石下水田面の標高は、この削平された2本の畔の間が一番高い。また西部では北西から南東への傾斜がある。1トレンチ西部では2本の溝があるように水田面が窪んでいる。溝はほぼ南北方向でかつ平行、心々距離は5.5～6mである。なお、2トレンチ部分の浅間B軽石下は、畔幅0.5～0.65m、高さ1～4cm、北91度東方向の畔と、真北を向く幅0.45～0.5m高さ3cmの畔がTの字形に交差する。交差部分は水口となっている。

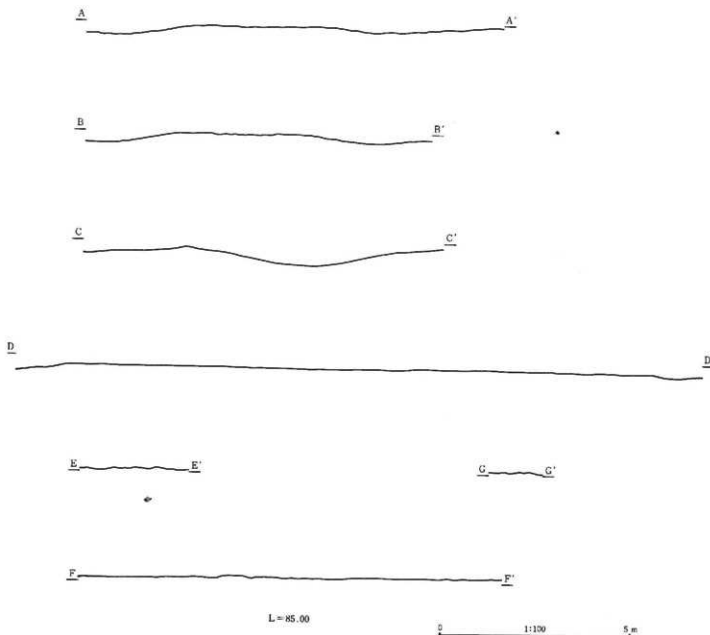


図24 浅間B軽石下水田跡エlevation図

2. 道路状遺構

1 トレンチの浅間B軽石下は、あたかも溝が平行するように水田面が窪んでいた。窪んだ部分の下層に溝の存在が推定されたため、トレンチ北隅で断ち割りをを行った。その結果、予想通り浅間B軽石下水田跡下層に2本の溝が存在し、その間の上面は平坦であった。よって、下図の1トレンチ内部に調査区を設定し遺構の調査を開始した。

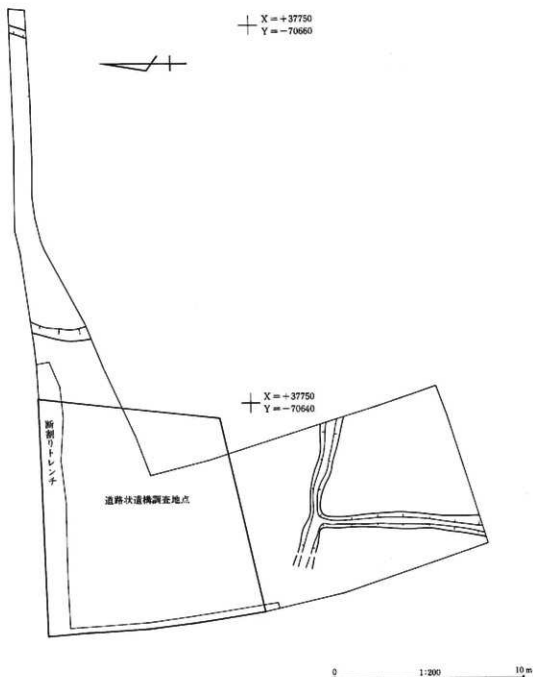


図25 道路状遺構調査地点図

下層の遺構は南北9.5m程度調査した。2本の溝に囲まれた面の方向は北1度東とほぼ真北である。上面の幅は2.9～3.4m、全体的に平坦であるが、中心部が端より1～3cm程度標高が高く、全体ではなだらかなかまぼこ形を呈している。上面を手でさわってみると踏み固めたように堅く締まっている。遺構面の標高は北隅が南より5cm高く、現在の地形と同様である。平坦面の両脇には大規模な溝がある。南北走行の高まった部分は両側に溝を持ち上面は平坦でかなりかたく道路状遺構とみられる。

西溝は北隅で幅3.7m深さ1.3m、断面形はゆるやかな逆台形である。なお北隅以外は西溝外側の立ち上がり部分が調査区外であり未調査である。覆土は上層は粘土質、中から下層は川原砂含んだ水平な堆積であり、溝に水が流れていたことが知られる。東溝は幅4.4～4.8m、深さ1.15～1.35m、遺構に近い方は鋭い立ち上がりであるが、反対側はゆるやかなU字形である。覆土は、西側は西溝の覆土に近い水成堆積であるが、東半部及び上層はシルトと砂を主体とした層であり、洪水起源と考えられる。東溝上部のシルト層は、連続して高まった部分の上面も覆っている。この遺構は、洪水によって埋没しその機能を失ったと考えられる。

下図は、高まった部分及び両サイドの溝から出土した土器の図である。1は東溝最下層出土、2は西溝最下層出土。ともに須恵器の坏である。還元焰で焼きは堅い。3は東溝最下層出土、須恵器の甗である。天井部は回転ヘラケズリ調整である。つまみやかえり部分は欠損している。4は西溝最下層出土、須恵器の碗である。かなり高台が高くつくりもしっかりしている。5は東溝出土、須恵器の碗である。還元焰であるがやや焼きがあまい。6は西溝最下層出土、土師質土器碗の口縁部である。酸化焰であるが、焼成はかなり良好で橙色をしている。7～9は道路状遺構面、遺構を覆う洪水起源シルト層からの出土である。7は須恵器の碗である。還元焰焼成で色は灰白である。焼きはややあまい。8は土師質土器碗の底部。酸化焰で灰白である。高台は欠損しかなり摩耗している。9は土師質土器碗の底部、酸化焰焼成で色は浅い黄橙、胎土はざらついている。高台は欠損するが、足高高台と考えられる。西溝下層の2は9世紀前半、西溝最下層の6は10世紀に位置づけられる。それに対し東溝は、底から出土した1が9世紀前半、5は9世紀末ないし10世紀初頭である。高まった部分では、7・8が10世紀、9は10世紀末ないし11世紀と考えられる。西溝は掘りざらいをした様子はなく、西溝の最下層で出土した10世紀の6と溝の掘削時期はあまり違わないであろう。

道路状遺構の建設は10世紀をあまりさかのほらない頃、廃絶は10世紀末ないし11世紀と考えられる。道路状遺構はほぼ北に向かっていて、遺跡地の北の方向には国府（群馬駅）推定地がある。発見した遺構は、国府（群馬駅）に向かう幹線道の可能性が高い。

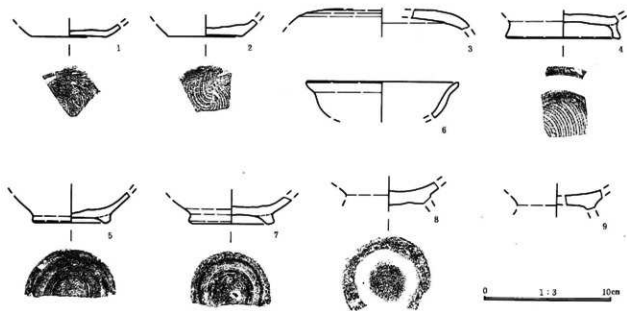
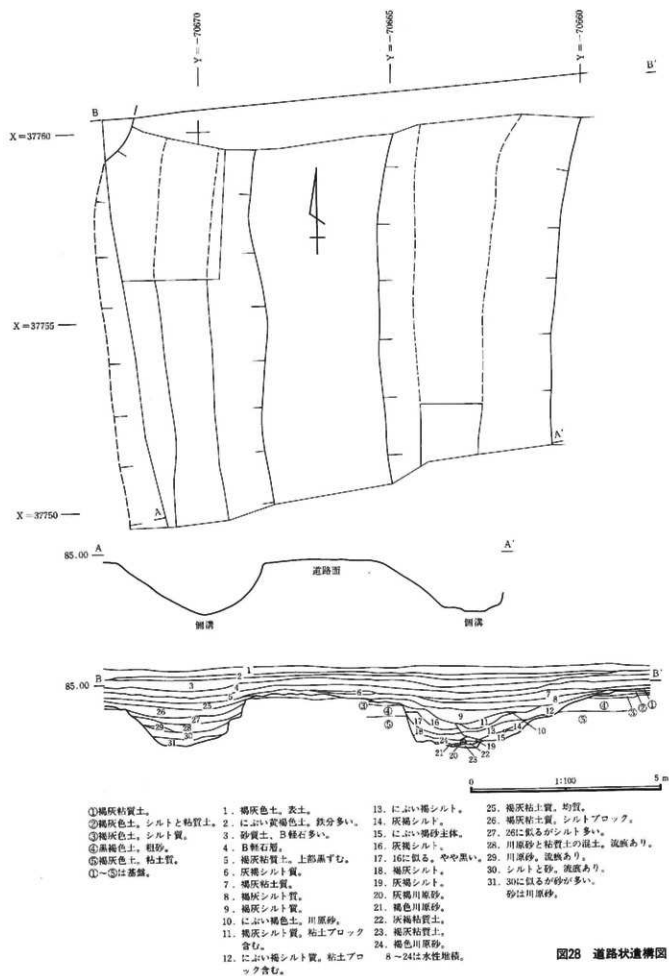


図27 側溝及び道路状遺構面出土土器図

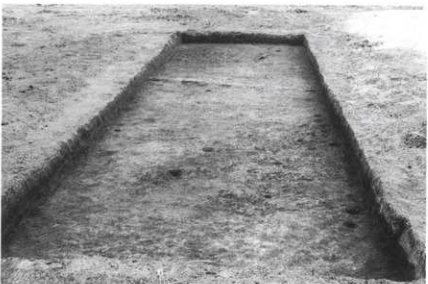




浅間B軒石下水田跡
1トレンチ 北から



同上接写
水田跡上面が埋んでいる



2トレンチ 南から



道路状遺構 南から



東側溝 北東から



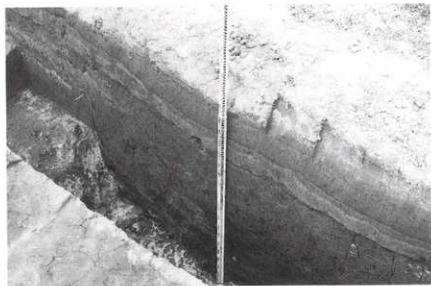
西側溝 南から



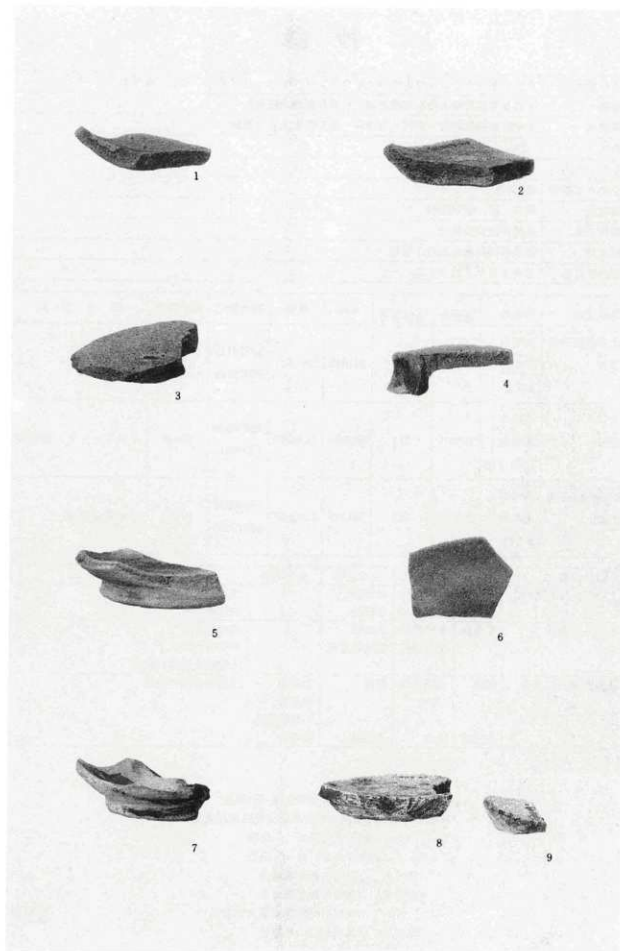
道路状遺構 北西から



西側溝作業状況



東側溝と地層 南から



抄 録

フリガナ	タカサキシナイショウキボマイゾウブンカザイハクツツチョウサガイホウ2
書名	平成9年度高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報2
副書名	上中居荒神Ⅱ遺跡・新保八坂遺跡・倉賀野東上正六遺跡
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第158集
編著者	関口 修、吉田昌利
発行者名	高崎市教育委員会
所在地	群馬県高崎市高松町1番地
発行年月日	1998年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ 市町村	ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
オミヤカインツツン 上中居荒神Ⅱ 遺跡	タカサキシ 高崎市 オミヤカインツツン 上中居町 345	102020	317	361848	1391403	19970715 19970728	132㎡	体育館建設
シンボウサカセ 新保八坂 遺跡	タカサキシ 高崎市 シンボウサカセ 新保町 1555-1他	102020	314	362015	1930246	19970528 19970612	394㎡	ガソリンスタンド建設
クラダノヒメノサキナシヨウ 倉賀野東上正六 遺跡	タカサキシ 高崎市 クラダノヒメノサキナシヨウ 倉賀野町 202他	102020	307	361747	1390208	19970206 19970306	879㎡	分譲住宅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
上中居荒神Ⅱ遺跡	生産跡	平安時代	水田跡 水田跡		浅間B軽石下 中近世
新保八坂遺跡	生産跡	平安時代 平安時代	水田跡 道路状遺構		浅間B軽石下 平安時代洪水下 大規模な道路状遺構
倉賀野東上正六遺跡	墳墓 生産跡	古墳時代 近世	周堀 水路跡	土師器 須恵器 石製模造品 陶磁器	浅間山古墳の外堀

高崎市文化財調査報告書 第158集
 平成9年度高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査2
 1998年3月31日 印刷
 1998年3月31日 発行
 発行者 高崎市教育委員会
 編集者 高崎市教育委員会
 文化財保護課埋蔵文化財係
 印刷所 株式会社 精真社

